



# 勝海舟と同志社

今 井 仙 一

行蔵は我に存す

毀譽は他人の主張

我に与らず我に聞せず

わたしのものもつとも好きな言葉の一つである。福沢諭吉に宛てた勝海舟の短簡のなかに見える。

明治二十四年の冬ごろ、福沢は「瘠我慢の説」という一文を草し、これを勝安芳、榎本武揚に送ってその意見を求めるとともに、これを公表して輿論に質してもよいかと問うた。この文章は、この二人の進退に関し「多年來心に積然たらざるもの」のあったのを忌憚なくブチまけたものであった。その中で福沢は、維新のさい、勝が、城を枕に討ち死にするだけの気概もなく、ひたすらに和を講じて西軍に江戸を明け渡したのは、「數百千年養ひ得たる我日本武士の氣風を傷ふたる」ものであると論難し、さらに、勝が、幕府瓦壊ののち、「旧幕府の旧風を脱して新政府の新貴頭と為り愉快に世を渡」っているのはじつに不埒千万だと攻撃した。それに対し、明治二十五年二月、勝は福沢に対してつぎのような答書を送ったのであった。いわく、

従古当路者古今一世之人物にあらざれば衆賢之批評に当る者あらず不計も拙老先年之行為に於て御議論數百言御指摘実に慙愧

に不堪御深志悉存候

行蔵は我に存す毀譽は他人の主張我に与らず我に聞せずと存候各人え御示御座候とも毛頭異存無之候御差越之御草稿は拜受いたし度御許容被下候也

二月六日

安 房

福沢先生

拙此程より所勞平臥中筆を採るに懶く乱筆蒙御海容度候わたしはこの手簡にふかい敬意を感じざるをえない。立派である。じつに立派である。よほどの人物でなければ、自分をきびしく攻撃した文章を「各人え御示御座候とも毛頭異存無之候」といった言葉が書けるものではない。人事を尽くして天命を待つというか、ともかく自己の最善をつくして行動し、そしてそれに対する他者の意見ないし批判のごときは毫も意に介さないところ、まさに超凡の高士の面影がある。それはストアの賢者あるいはスピノザのかの孤高清澄な心境に通ずるものと見られてよい。わたしは不幸にして勝海舟の人柄は全く知らない。しかしもし「文は人なり」という言葉が正しいとすれば、この短簡一つからだけ見て、彼はおそらく大悟の域に参じたる非凡の達人であつたに相違ない。

なお、ついでに言えば、勝と福沢とは古い知り合いであった。というのは、安政六年十二月、軍艦奉行木村撰津守を総督とし、勝麟太郎を艦長とした軍艦咸臨丸が北米サンフランシスコに向かつて航したとき、福沢もまた木村に乞うて行をともにすることを許された。だから往復六カ月にわたる長途の旅行を通じて辛酸をともにした勝と福沢とは、互いに十分によく知り合うことができただけからである。

ところで勝は非凡の達人であつたとともに、また無類の悪口家ないし毒舌家でもあつた。その証処に、明治三十年七月十五日、巖本善治が勝を氷川の邸に訪うたとき、二人の間にはつぎのような対話が交されているのである。

「木村は、福沢サンを家来につれて行たそうですが、アレハ一処にいらしたときですか」。

「ソウサ」。

「福沢はご存じなのです乎」。

「諭吉カハ。エー、十年ほど前に来たきり、来ません。大家に



なつて仕舞いましたからネ。相場などをして、金をもうけることがすきで、いつでも、そういうことをする男サ」。

ついで、明治三十一年十月二十三日には、勝と巖本との間につぎのような対話が交されている。

「福沢も、少しいい方だそうナネ」。

「十九日比から少しいいそうです。維新のとき、福沢から、何か書いたものを出しましたか」。

「イエ、ありません。あのときは、何でも、本所辺にかくれて居つたそうナ。弱い男だからネ。夫で、あとから、何んとか角とか言うのサ」。

慶応義塾の創始者も勝の口にかかると同じに散々のていたらくだと言わねばならない。

それでは、同志社の創立者の場合はどうであつたろうか。若王子山頭の新島の墓碑に刻まれてある「新島襄之墓」が勝の書であることは今さら言うまでもないであろう。その碑背には「明治二十三年一月二十三日友人勝安芳悼新島氏之長眠、追悼之余書之」と記されてある。そのかぎり勝と新島とは一応したい友人であつたと見られてよい。しかしひとたび江戸ッ子海舟の毒舌にかかると否や、温厚の士新島もまたひとたまりもなくそのヤリ玉にあるのである。たとえば明治二十九年十一月三日、勝は巖本に対してつぎのように語っている。

「新島が大学を建ると言うて来たとき、左様言うた。お前さんは千両の金でさえ、そう扱つたことのないのに、十万という金を

募るといふは、迎も出来ないから、およしなさいと言つた。すると、西洋人が大相賛成すると言ふから、それだから面白いと言つた。そのとき大相怒つて歸つて仕舞つたが、二三年は少しも来なかつた。すると、顔色衰へ、大相弱つて出て来て、前年仰しやつて下さつたことは、今になって初めて分りました。もう実に有がたい。私は余計なことを初めかけて大相困ると言つた。それで私は言つた、お前さんも、これほどのことをして、一度失敗して気が着いたからは、今度ほど本當のことが出来ましようから、そんなに弱らないで、緩りとお休みなさいと言つた。左様仕舞しようと言つて、大磯へ行つたが、二三ヵ月すると、とうとう死んで仕舞つた。

それで、小崎や、徳富や、何弾正や横井などを呼んで、そう言つた。同志社はもうこれでつぶれるから、つぶれると思つて、銘々別れて、それぞれ小さなものを創めなさい。新島にも村夫子でなさいと言つた。だからと言つたが、用いない。徳富は剛巧な奴だから逃げて仕舞つた。横井が先達で来て、いやどうも先生の仰しやつた通りだと言つた」(傍円巖本)。

これで見ると新島はすくなくとも二度勝を訪問したことになつてゐる。あたかもそれと符節を合わすかのように照応するのは、明治二十一年十一月十九日、新島が勝に宛てて書いた書簡である。その中にはつぎのような言葉がある。「陳は過般は久々にて高門を叩き、知らず識らず長坐におよび、ご馳走頂戴、また種々のご経験話を拜聞仕り、心算かに覚るところこれ有り、深く先生のご訓誨を服膺仕るべく候。その節も矢張り、五年前に罷り出で相願

い候同事件、即ち私立大学設立の事業に付き、懇々先生のご賛翊を相願い候処、五年前のお言葉とは大いに相違し、甚だ快く賛翊の儀ご承諾成し下され候条、小生において何の喜びぞ之れに如くものあらん……。」さらにその追伸において新島はつぎのように書いてゐる。「尚々五年前、非常に御たたき下され候先生のお言葉は、却つて今日の結果と相成り、また今日先生のご賛成は……云々」。

さきの勝の言葉では、新島の第一回の訪問と第二のそれとの間には「二三年」の間隔があつたことになつてゐたが、新島の右の書簡ではそれが「五年」になつてゐる。その点勝の記憶にはたしかに一つのあやまりがあつた。なぜなら新島が初めて勝を訪問したのは明治十五年九月九日であり、そしてつぎに訪問したのは、右の手紙で「過般」と言われているところから推して、おそらく明治二十一年の秋と思われ、その間正確には六年の歳月が流れているからである。しかしそれはいづれにしても、第一回の訪問のさいには、勝はかなりシラツツに新島をやつつけたものと思われ。それは「尚々五年前、非常に御たたき下され候先生のお言葉」(傍点今井)という新島の言葉からしても明らかであるであらう。だが、第二回目ときは勝はある程度新島の計画に賛意を表したもののようである。

なお、さきに勝は、新島が二度目に彼を訪問したあと、大磯に赴き、「二三ヵ月すると、とうとう死んで仕舞つた」と語つていたのであるが、ここでも勝老翁の記憶は若干ボヤけていたのではなかつたらうか。なぜなら新島の第二回の訪問は右にわたしの推

測したようにおそらく明治二十一年の秋であり、そして新島の永眠したのは、周知のように、明治二十三年一月二十三日であり、その間一カ年あまりの歳月が経過しているからである。

わたしはつぎに巖本善治によって記録された勝の言葉の中から同志社に関係ある二、三の箇所を引用したい。そこには毒舌家・勝の面目躍如たるものが見られるであろう。しかしそこにたんに勝の毒舌のみを読んで、その裏にひそむ勝の真情、同志社の前途にふかい関心を有した彼の真情を読みとりえない者は、おそらく眼光紙背に徹せざる浅薄者流と言われねばならないであろう。

明治三十年七月七日。「誰でも、自分で仕たがって、夫で出来ぬが、どうしてもせずにおるということは、前に余程やった後でなければ、出来ぬものか知ら。実に分らない。同志社なども、ドウセ立行かないよ。田舎に大な地面でも買って置いて、万一のときの用意にしたら宜ろうと言うた。小崎は善かったのだが、どうして左様なるか。何でも、長く人の上に立とうとスルト、そうなるようだ。上に立とうというのは、中々出来んものだから。横井なども、善い加減にして、早く止めて帰るが善いと、左様いうてやった。京都大学の教師にでもなりやしないカネ。」

明治三十年十月十五日。「横井も困っているだろう。同志社はどうしても潰れるネ。」

明治三十一年三月十四日。「同志社はどうせ潰れる。新島が居たらば、なお早く潰れるという、コッチの見込だ。」

明治三十一年六月十九日。「新島は少しは出来る男だと思ったから、夫で、ひどく言うてやったのサ。初めから、逆も出来やし

ないと言うたのサ。どうして、仏徒などの初めは、大した苦勞だから。(中略)。新島などは、ただ仏教が悪くい、悪いと言うだけのことで、何も知りや、あしない。ワシの方が、まだ仏書を読んでいるぐらいだもの。夫で、どうして出来るものか。耶蘇の人は、是迄、何も出来やしなないよ。津田でも、あの通りサ。夫で、新島が死んだときに、皆んなにそう言ったのサ。どうせつぶれるから、潰してお仕舞い、そして、銘々自分だけの一機軸を出してやるが善いと言うたけれども、分らない」(傍田巖本)。

このほかにもなお二、三の箇所があるが、紙数の制限もあるので、残りは割愛することとしたい。

わたしはこの一文をわたしの最も好きな勝の言葉ではじめた。わたしはこの一文を同じくわたしの最も好きないま一つの勝の言葉で閉じたいとおもふ。それは明治十五年九月九日、新島が初めて勝を訪問したとき、勝が揮毫して新島に与えたものである。いわく、

自処超然 処人靄然

無事澄然 有事斬然

得意冷然 失意泰然

附記。——右の一文を草するにあたり、わたしはつぎの三書を参照した。福沢諭吉著『福沢選集』、巖本善治編『海舟座談』、同志社編『新島襄書簡集』、いずれも岩波文庫版である。——なお、記述の關係上、創立者、新島先生を呼ぶに一々敬称を附せなかつたことを深くがめないで頂きたい。

(法学部長・教授・政治哲学)

# 石・木・人間

小松 幸雄

中学校の終り頃から高校時代にかけて、わたしは妙に陶淵明の詩文にひきつけられたり、ツルゲネーフや国木田独歩の小説を読むことによって自然を見る目を養われたように思う。いやそれより前、小学校に上るか上らぬときから箱庭造りなどが無性に楽しかったことを覚えていたのだから、わたしの庭いじりの趣味はかなり年期？がはいっていると言えようか。そんなわけか池田首相の庭造りや石好きのゴシップが新聞にのると、自然よくわたしの目に止るわけである。

ところで、その池田首相が昨年ヨーロッパを廻られ、最近亡くなられたローマ法王との会見の際、やはり石が好きだと話されたようだ。後日、法王は「日本の池田首相は貴金属や宝石を好きといわず、石が好きだといった」と語られたそう。石が好きだという答は法王の意表をついたものだったのであろう。北イタリアの篤信だが清貧の農家の出である法王は決して貴族趣味ではなかったと想像されるのであるが、それでも自然のままのうぶな石に美と

価値を見出す趣味は理解出来なかったのではあるまいか。金色まばゆく輝き、これでもか、これでもか、といわんばかりの誇張と技巧豊かな美術の粹をちりばめた法王宮のゴディヤスな趣味に対して、くすんだ無技巧なデフォルムのかげりのような貧相その物としての石とは、あまりにもかけ離れた対照物である。西欧の美とか趣味とはあまりにも血縁のつながりがないものであるからである。寶石と較べてただの石が愛玩の対象となりうるという趣味が、ただ奇異な東洋のそれとしてのみ法王に理解されたのであるうか。それとも人の心の底の底まで見ぬかれる法王であつてみれば枯淡な、清廉な趣味として感心せられたのであつたらうか。

また池田首相がドゴール大統領に会われたときも、やはり石の話が出たようだ。大統領はあとで、「池田さんは石が好きだ」と話されたが、わたしは石は嫌いだ。木と人間の方が好きだ」との批評だったとか。これもわたしは面白い意見だと思う。石も木も同じように無情のものではある。地球の骨格の一かけらとも見られる石が風雪にさらされてやせ細り冷え切っているのに対し、春ともなればみづみづしく若葉して、しかも花をつけ芳香を放つて身を飾る木の方に、どれだけ人はひきつけられることか。たとえ落葉して、厳しい冬に死んだように眠つていても、やはり木の肌は石よりも温いのである。いわんや人間。泣き、笑い、愛し合い、またときに血を流してまでも争い合う造物主の傑作としての人間。この人間に石よりも木よりも魅力を感じるのには人間本来の性情というもので、ここに特別にどうこういうほどのことでもありません。ただ優れた軍人で、フランスの栄光をたたえ、フランスこそ西欧

近代文化の本来元と自負する誇り高い大統領自らが、何よりも祖国を愛すといわず、何のてらいもなく人間が好きだといったところに、共感もてるのである。かつてわが国に、多くの兵卒を戦死させた老將軍が「われ何のかんばせあつてか父老にまみえん」と感慨を詩に托されたことは、よく人に知られているところである。この將軍にも人間が好きだという言葉があつたかどうか、寡聞にして知らぬのである。わが国の旧陸軍でトルストイの小説が禁断の書であつたことを言えば、軍人に高いヒューマニズム精神が漂っていたとは考えられぬことだ。この点、近代ヒューマニズムの祖国フランスにおいて、それが大衆の生活の中にしみこんでいて、その広いすそ野をもつてひろがっている高嶺に立つ大統領である軍人の言葉として興味がわくのである。

しかしこのフランスの人間礼賛のヒューマニズムも、その発展過程の一時期には、過度の自己主張に陥り、それが自己意識の過剰になったり、現実からの逃避になったりした。或はこのヒューマニストは審美的な生活態度が昂じて、はては放縱な生活が始められたりしたのであつた。そしてこの人間礼賛思想の温床である都市——富と貧困とが背中合せとなり、美德と罪悪がうずまき、亭楽と哀愁がむすびつき、およそ人間の醸し出す雑鬧の巷からヒューマニストの逃亡が始まることになる。彼らは風光明媚な田舎の別荘生活に逃避して行く。いわゆるブルジョア・ヒューマニズムであるが、人間賛美の思想が自然の風光の中への逃避行となる矛盾の発展となつて行く。

このフランス・ヒューマニズムの田園への逃避と、東洋の文人、

賢人達の現実逃避の隱遁生活とは、一体どこがちがうのであるか。現実からの逃避という点においては同じであつても、その内容は異なるのであるまいか。前の方の生活の中には、やはり生きざい人間の生活が、社会から自然の中へもちこまれたというのであつて、やはり自然と人間との間には割然と一線が布かれ、一定の距離が保たれている。そこにはサロンの雰囲気が生まれ、庶民とかけ離れた高踏の生活が営まれたのではないだろうか。ところが後の方では、光風清月を楽しむ生活が求められ、自然と人間生活の距離はとりはずされて了つたというのではないか。「とほそ落ちては月常住のともし火を掲ぐ」というような自然そのものの中に融けこみ、それ自体を楽しむ生活が想像されるのである。両者の生活態度の相違が、富の蓄積の相違や技術の発達の違いからくるものであるということだけで、説明しきれぬものであろうか。

フランスにもモリエールの「人間嫌い」があり、ルソーの「自然に帰れ」の提唱もあつた。だからといって、この自然に帰れの思想は、木や石を愛する生活へとは発展しにくいのである。その思想は文化の虚飾、文明の繁さを嫌つて、生き生きとした自然の中で人間本来の生命の躍動する健康な生活感情をうたい上げるのである。自己の生命の充実のための自然生活への復帰であり、自由の中においての自己形成であつて、自然の中へ自己を没却するものではない筈である。人間の平等、フランス絶対王制の束縛からの解放の場が自然の中に求められたものではなかつたか。東洋と西欧との自然と人間の結びつきには、やはり、へだたりが感じられるのである。たとえばきびしい禁慾を要求される修道院の生活

において、小鳥が愛されたとしても、木や石を愛する、とくに石を愛するような境地に自己の生活を追いつめるようにはならぬのではない。禪坊主が美しい色花をことさらに遠ざけ、自然を造り上げている諸要素の中で最も根元的なものの一つである石を求めて枯山水を造り、石庭を設ける境地と前者との間には大分異なるものがあるのではないか。人間生活をぎりぎりの極限にまで追い込んで、自己を殺し、否定することによって、却って万人と共通する偉大な自己に昇華させようとした禪坊主が、自然の諸要素の中の最も単純な一要素としての石に却って大宇宙の偉大さを見出さんとする。自然と自我との対決であるが、ここには対立でなくて自然を通じて自己の止揚が感ぜられる。

アデナヴァー西独首相が昨年来日され、龍安寺の石庭を前にして、こんな静かなところで哲学を考えてみたいという意を伝えられたとか。老首相にこの石庭は何を物語ったであろうか。彼首相はドイツ人らしく、この庭のウェーゼン（真の意味）は何であるかを考えられたのではあるまいか。石は嫌いだと言はれたドゴール大統領とちがって、このわざとらしくらぬ石のたえずまいに技巧を越えた技巧を見出し、西欧にもたぬ美のカテゴリーを見出されたであろうか。自然のままの石だけを排列して人間の意思を力強く象徴させる芸術。幾千万年の風雪に耐え、しかも永遠に残る石の力強さと孤高のさびしき、これを首相はどう判じとられたであろうか。

今年の春、大阪の世界医学会に参加されたドイツの生化学の大家でノーベル賞受賞者が、日本人は石にレーベン（生命）を感じて

いるということに興味を示されたことを、わたしはテレビのインタビューで知った。石のもつ美ということであればまだしも、石が生きていると感じる日本人の民族心理に興味があったようだ。

「この石は生きている。いや死んでいる」という言葉は囲碁仲間がよく使はれるが、これは単なる比喩的用法である。庭師がこの石の置き方は石を殺しているという表現も擬人法にすぎない。けれどもつくばいや庭石に毎朝水をかけ、それがさびて苔むすことを希う日本人の心情は、やはり石にも生命を感じ、その年齢を救えることに喜びを覚えるというのではないか。乾き切ってかきかきに生きている石に打水すると、それがたちまち生氣をとりもどし生き生きとしてくるのを見るのは、丁度生き物に水をやるのと同じ心持であって、石をいとをしむ感情の発露である。「さざれ石の巖となりて」という歌は、自然科学の理法には合はぬものである。けれど石も歳を重ね老齢になって行くと考えることに矛盾を感じない。擬人法的発想と割り切って了えるのであろうか。「鴨山の岩根し捲けるわれをかも」と石見国の僻村で歌った人麿の表現は岩をいとしい都の妻と対置したところに、わたしは興味をわくのである。西欧流にクルテールとナテールとはつきり対置せずに、石をも抱くところに日本人の感情が生きている。地方に旅行してみても木にしめなわを張りめぐらしたり、石にもそれがしてあるのによく出くわすことがある。これらはわれわれの祖先が、自然への驚異にたいする神格視の現れたものの一例であらうが、この感情は跡を絶つたのであろうか。

わたしの知っているある庭師は、石燈籠の年代を判定する最後

の決め手として、目をつぶりその石肌じつと手を当て、精神を統一するのだそうだ。そうしていると、これが何百年の風雨に曝されてきたものであるかを決定し、間違わぬと話してくれた。この話は丁度医者が病人の脈をとって、人の命を診るのと同じように石にも生命があるような扱い方ではあるまいか。わたしはいいいな少年の頃、庭の紅葉の新枝を曲げて輪に結んでいたら、祖母は木がかわいそうだからそれを解いてやれと、訓えられたことをよく覚えていた。この祖母は牛肉をたべず、だし雑魚のはいった味噌汁も嫌っていた。これは片田舎の無学な普通の仏教信者だった祖母の慈悲心が、禽獣のみか草木にまでおよんだことをわたし自身の体験で知っている。この善男善女の大衆の中までしみこんだ仏教の教義それ自体の中から何故にヒューマニズムへの発展が見られなかったであろうか。わたしには大きな疑問がわくのである。紅葉の枝が自然にのびることを希う仏教教義から、人間が自然の性情に従って生活することの喜びを何故見出されなかったのであろう。日本の仏教や神道きては儒教の中かなぜ人間性解放のプロテスタが行なわれなかったのかという疑問である。親鸞があるではないか、旧仏教に対し日蓮の反抗、その日蓮宗に対する創価学会のプロテスタ。儒教の完成としての朱子学は訓詁の学へと陥り、老荘の思想も人間性の解放とはならなかったようだが、諸子百家の中にヒューマニズムをとえた人があったかどうか、素人のわたしはよく知らない。でも仏教の輪廻の思想は人間のみか禽獣、草木へと及びてゆく広大な慈悲心とはなっている。けれども、ここでは遂に人間性の復興の火花は燃え上らな

ったのであろう。東洋の、そして日本に根を張った宗教、倫理思想は凍結して、それを融かすには巨大な焔が必要であつたようだ。そしてその火種は外国、西欧から移されねばならなかったのだ。このようにして西欧から迎えられた火種は仲々燃え上らなかつたが、戦後の民主思想と共にプロレタリア・ヒューマニズムの急速な普及をみるにいたつたのである。けれど已にその行きすぎが見られるようになったのであるまいか。人間性の高揚、解放は、一部にはむしろ目にあまるものがあるといえよう。ブルジョア・ヒューマニズムの反省としてプロレタリア・ヒューマニズムの普及浸透、そしてその反省がいまや要請されているのではないか。最近、日本美の再発見、日本発掘というような言葉をよく耳にし、池田さんの「人造り」のキャッチ・フレーズも随分よく人の口の上つてくる。これらを思いあわせるとき、われわれは、われわれの祖先が豊かな審美観や自然観を残しているが、それらには宗教や倫理観とも結びついたものをさえ感じさせるものがある。現在要求されている新ヒューマニズムも、これらの遺産の土壌の中に何かが掘り出せるのであるまいか。人造りの問題だつて同じようなことがいえるのではないか。ヒューマニズムはその思想体系の中だけで自転し発展するものでないと考えるのだ。こんなことをいえば、素人のわたしの無知を自ら公言するようになるのであろうか。随筆としてつい気軽な気持で筆を運んできたので、読者のお見のがしをお願する次第である。

(経済学部 教授・農業経済論)



# 雲峰と明治文学

重久 篤 太郎

近頃、明治文学の研究がいよいよ盛んになるにつれて、同志社出身の文人の著作も再検討されるようになるかも知れない。久しく絶版になっていた柳田泉氏の「明治初期の翻訳文学」（昭和十年初刊）



磯貝雲峰

には、「同志社教授山崎為徳」という一章があるが、このごろ再版されて社会的に忘却された山崎為徳の西洋文学移入の功績を再び読書

界に伝えている。創成期の詩人では、湯浅吉郎（半月）の名は「十二の石塚」で著名であるが、磯貝由太郎（雲峰）は詩人であり、翻詩家であり、評論家でありといった工合に多彩な文学活動をしたが、不当にも文学史から忘却されている。戦前では木間久雄氏の「明治文学史」下巻に残花と雲峰とを比較した一文があり、戦後では山宮允氏が「書物と著者」と「日本現代詩大系」（河出書房版）第一巻創成期の解説とにおいて、雲峰の伝説と彼の新体詩の業績を述べているに過ぎない。また「同志社五十年史」「『一私学の歩み』——同志社の場合」などの肝心の同志社側の史料には雲峰の名は一つも出ていない。少なくとも雲峰の詩人としての業績は再検討すべきではなからうか。この意味において、彼の伝記事項について、その資料の二、三を示し、誤聞も改めておきたい。

## 雲峰と明治女学校

磯貝由太郎（雲峰）（一八六五—一八九七）は明治十八年に同志社英学校に入学し、二十二年に卒業した。中瀬古六郎、加藤延年らと同期である。同志社を卒業するとすぐに東京に出て警醒社の社員となった。間もなく「女学雑誌」の主筆であった巖本善治に知られて、この雑誌と表裏一体の関係であった明治女学校教員となった。

その明治女学校にあるとき、主として「女学雑誌」にはほとんど毎号筆を執り、詩歌、訳詩、小説、評論など多方面に才筆をふるった。

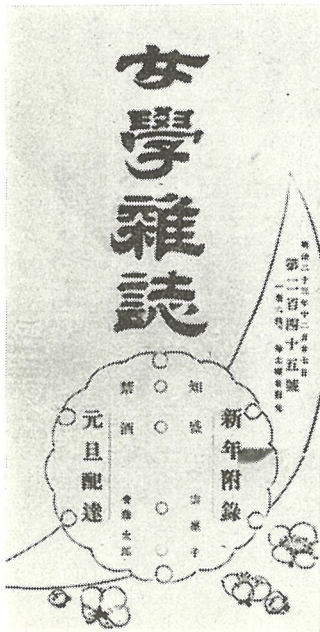
「女学雑誌」は明治十八年七月の創刊から三十七年二月の終刊にいたる二十年の間には、その時期によって違いはあるが、女学生が読んで多大の影響をうけた外に、その愛読者を当時の青年の中にも多くをみたという。同志社出身者では、磯貝雲峰、三輪花影らが寄稿したが、湯谷磋一郎は明治二十四年九月から数年同誌の編集にあたったことがあり、また同誌が姿をけす最後の三号の編集人は青柳猛（有美）であった。

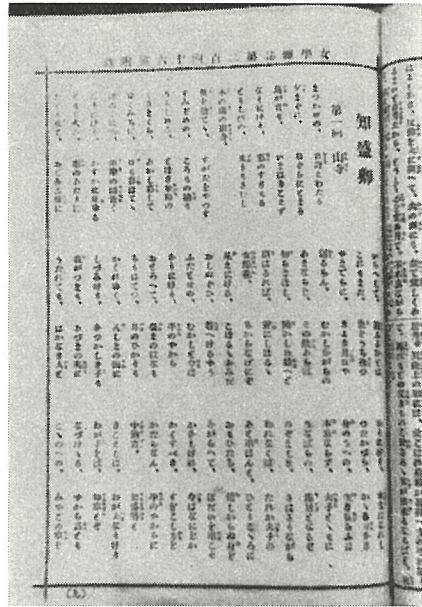
雲峰の文学活動は、早くも明治女学校教員時代にはじまって、国文学の素養を根底とし、新に受容した西欧的浪漫文学に育まれた詩歌の創作を発表したのである。明治二十四年（一八九一）一月の「女学雑誌」に収載された五七調の長篇叙事詩「知盛卿」は、わが国の史実に取材したスコット風の叙事詩であるが、詩歌に対する感性和熱情とを吐露した彼の代表作である。雲峰の詩作を再評価した山宮允氏は、その編集した「日本現代詩大系」創成期の巻に、「知盛卿」を収録している。

さて、雲峰が詩作活動の端緒を開いた明治女学校教員在職のこと

は、山宮氏の調査には洩れ、東京都政史料館の私学関係書類の中には、明治女学校記録は明治十九年の開学当時のものしか残存しないので、磯貝に関する文書はない。また同志社出身者で明治女学校教員になった英語の青柳猛、国語の湯谷磋一郎の二人の簡単な履歴書だけが、旧東京府文書の中に残っているに過ぎない。

雲峰が明治女学校員であったことは、同窓の加藤延年の回顧談にみえるに過ぎなかったもので、久しくその裏付となる資料を求めていたのであるが、漸くこのごろ、明治女学校の研究に詳しい東京女子大学の青山なを氏の「女学雑誌」の基礎研究（その一）（東京女子大学「比較文化」第九号、昭和三十八年二月）の中に、そのことを確認できる一資料を見出すことができた。すなわち、これによると、「女学雑誌」第一九号（明治二三、一、一）の中に、女学雑誌社が「通信女学」という月刊の講義録を明治二十三年一月から発行する予告記事を引用している。しかも、その教授科目と教師をあげ





でいるうちに、

科目	一年枚数	一月枚数	教師
万国史	四五〇	三八	明治女学校教諭 木村 祐吉
算術簿記	一〇〇	八	同 磯貝由太郎

など教師は主に明治女学校教員である。この資料は断片的であるが、明治二十二年（一八八九）に磯貝雲峰が明治女学校教諭であったことを実証するものである。ついでに、木村祐吉は木村熊二の長子であるが、明治十六年九月から約半年同志社英学校に在学したことがあった。

### 雲峰と月郊

明治二十五年（一八九二）十二月、高安三郎（月郊）は何かの雑

誌で同志社女学校に新島文庫が新設されるという記事をみて、彼の言葉によれば「信仰も違うのに神来の興のように思ったって、欧文学書若干を寄贈した。」

その目録が残っているのをみると、英書三十部、三十五冊の中には、ダンテの「神曲」のごとき古典から、シエークスピア、ミルトン、バーンス、スコット、カンベル、ムーア、エリオット、カアライル、アーノルド、エマアソンなどの英米文学、それにポズネットの「比較文学論」(H. M. Posnett, Comparative Literature)——坪内逍遙は明治二十三年東京専門学校に文学科が設置されたとき、ポズネットの「比較文学論」を講じた——があることに注目される。さらに、ゲーテ、シラー、ハイン、レッシング、ユーゴーなどの独仏の文学作品、またカント、ショーペンハウエルのごときドイツ哲学もあった。いま、そのテキストを調べる暇はないが、おそらくは明治二十年代の始めに丸善書店が輸入して読まれていたニューヨークのジョン・W・ラヴェル (J. W. Ravel) 会社から出していた「ラヴェル文庫」のものであろうか。この叢書は英米の文人の著作のみならず、ダンテ、ゲーテ、シラー、ユーゴーなどの大陸作家の作品の英訳を網羅したものであった。

ところで、高安月郊は、そののち同志社図書館や新島文庫を訪ねたが、その蔵書は「英米のお定りのものばかりで、他国のはなかった」と語っているのので、恐らくこれが同志社に欧大陸文学が注入された最初であろう。

この寄贈をうけた同志社では、誰も高安三郎を知らなかったのので、不思議に思っ、同志社女学校教員であり、海老名みや、松浦政恭

と名を連ねた発起人の一人の磯貝由太郎は、大阪道修町に月郊を訪ねた。雲峰はこのときすでに「女学雑誌」「六合雑誌」など中央の雑誌に新体詩、訳詩、評論などを発表していたから、月郊の方では彼を知っていたが、彼の方では月郊を全く知らなかった。しかし、そのとき、月郊はイブセンやドストエフスキーの作品を愛読していたので、その話を持ち出すと、いよいよ奇として雲峰は、「同志社文学」にその原稿を発表することを望んだ。この二人の青年が文学談で共鳴したが機縁となり、イブセンの「社会の敵」、ドストエフスキーの「損害と侮辱」「虐げられし人々」を訳して、月郊が「秋風吟客」という仮名で「同志社文学」へ投じたのは明治二十六年（一八九三）のことであった。

「同志社文学」(第一期、明治二十年三月—二十八年四月)は、同志社英学校文学会の機関雑誌であるが、文学という名を冠していても純粹の文学雑誌ではなく、社会科学でも、自然科学でも、文章として表現できるものはみな文学の中に包含していたのである。それに、明治初期の同志社は、ビュリタンの色彩が濃厚で、文学は育ちにくい不毛の地であった。少数を除いては、一般に文芸が理解されなかったようであった。これを思えば、同志社出身の文士はほとんど全部が中途退学者であることも、その間の事情を物語るものであろう。

ことに、外国文学が「同志社文学」誌上に現われるものといえは、英米の文人の略伝と翻訳とが少し出ているぐらいであったところへ、月郊がイブセンやドストエフスキーのごとき本格的な大陸文学を紹介したのである。しかも、明治二十六年（一八九三）といえは

「社会の敵」の英訳 An Enemy of the People が出た一八八八年から僅に五年の後のことである。「アトランティック・マンスリー」などでイブセン劇を知った月郊は、二十四年にその英訳を海外から取り寄せていたのである。このイブセンは英訳からの重訳であったが、原作の忠実な逐次訳であって、決して簡単な筋書の紹介ではなかった。それがイブセン劇を日本に紹介した嚆矢であり、また「同志社文学」の名を高からしめるものでもあった。もともと、ドストエフスキーの方は、それよりも半年前の二十五年に内田不知庵（魯庵の初期の号）が「罪と罰」を英訳から重訳している。

雲峰は月郊の大陸文学の邦訳を高く評価し、その頃、警醒社、東京堂を通じて東京でも売り出されていた「同志社文学」誌上に毎月、月郊の翻訳を掲げることが特筆、予告していた。ところが、この二つの邦訳は、いずれも未完成のまま中止されてしまった。

それは、雲峰が名古屋の金城女学校教頭に転じ、「同志社文学」の編集から離れたためでもあったが、また一つには月郊の邦訳は当時の読書界に受容されるには時期尚早でもあったらしい。雲峰から編集のバトンを受け継いだ柏木義円は、月郊訳のドストエフスキーを、文藻欄の末に小さく六号活字で組んでしまった。多分、編集者が代ってこのような取扱いをうけたことが気に障ったのであろうか。月郊はイブセンの訳とともにこの翻訳が、歴史的意義をもつものになろうとは知らなかったもので、ついに中止してしまつたのである。しかし、月郊のイブセン訳業は徒勞に終つたのではなかった。それから八年後に、東京専門学校から文学叢書を出すについて、坪内逍遙から交渉をうけ、その結果「社会の敵」の邦訳を完成して「人



同志社大学長

上野直蔵

次期学長を不敏なわたしは再びお引き上げすることといたしました。もとよりその任務の重大を知っています。しかも今後十年間は私立大学間の格差をいちぢるしく大にする期間であることを考え、本学がよりよき大学として新島先生の素志を如何にして現代において実現し、永久に存続していくよう企画を再開せねばならない秋にあたりました。果たして、わたし如き非才がその重責を全うしうるか、甚だうたがわしいのであります。しかしながら、これすべて選挙の結果でありますことを思えば、無下にお断りすべきものではなく、与えられた二年半の期間を全力を傾倒してその与望におこたえたいと存じます。どうか皆さま方の絶えざるご忠告とご指導をお願いすることができ、その職責をよく完了し得ますよう祈念しております。

形の家」とあわせて出版した。

雲峰と「朝日歌壇」

明治二十八年、文芸に対する熱情が盛んな雲峰はアメリカに渡り、ウイスコンシン大学で英文学を学んだ。やがて同志社と縁故の深いアーモスト大学に転じ、その在学中不幸にも病魔の侵すところとなつて、やむを得ず三十年に業半ばにして帰国した。帰国後、東京で養鶏などをして療養していたが、同年（一八九七）十一月二十九日東京渋谷の寓居で没した。

山宮允氏の「書物と著者」によると、雲峰は病氣加療中に朝日新聞社の求めに応じて和歌の選者となつたとある。しかし、「朝日新聞読書応答室」からえた調査では、明治三十年の「東京朝日」にも、「大阪朝日」にも、いまだ一般から募集した歌壇はなかった。従つて磯貝雲峰が「朝日歌壇」の選者になつたという事実がないことは、当時の東京、大阪両紙の紙面を調査した結果ではつきりした。もとより、雲峰は詩人としてのみならず、歌人としても優れていたけれども、彼が「朝日歌壇」の選者であつたという説は、上州の九十九（つくも）村——現在松井田村合併——に雲峰の歌碑

早蔵を折りし昔よしのばれて  
恋しくなりぬ故里の山

を建てた甥の故内田市太郎海軍少将が伝えた誤聞である。

「朝日歌壇」がはじめて「東京朝日新聞」の紙上に掲載されたのは、明治四十三年九月十五日のことであつた。しかも、一般から募集した歌壇の最初の選者は石川啄木であつた。